

新しい年の始まりに

校長 木村 滋夫

新年明けましておめでとうございます。皆様には、すばらしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

新しい年、平成20年が子どもたちにとって明るく充実した毎日であらんことを願ってやみません。そのために、我々教職員は、日々自らの感性を磨き、その指導力の向上を目指して取り組んでまいり所存です。保護者・地域の皆様には、昨年同様のご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。

内閣が替わり、教育再生の言葉が一人歩きしなくなったのは結構なことですが、昨年の全国学力状況調査や理数科ばなれなどから、ゆとり教育の見直しを含めた授業時数増を盛り込んだ学習指導要領について年内に告示され、移行期間を経て平成23年の完全実施へ動き出します。教育内容が時代の流れの中、変遷していくことは当然でしょうが、「流行と不易」、いつの時代にあっても変わらないものがあるはずで、その中でも、人間性・社会性を育むことは知識や技能の習得とは異なり、人間の根幹を形成する大切なものだと考えます。その人間性・社会性を育むもとになるのが、「愛」と「感性」だと言われます。

子どもが愛し愛され、思いやりのある人間に成長してくれることが親としての最大の喜びだと思います。ただ、愛は本能的に備わっているものでなく、愛されることによって学び取るです。したがって、まず愛されなくてはならない。愛を十分に与えられて子どもは、やがて愛情に満ちあふれた人に成長していき、社会性も備わってきます。

人間にとってもう一つ大切なものが感性です。外部を感じる五感とは異なり、自然に身に付くものではありません。愛情、人情、価値や、真・善・美に感動する気持ち、感じる心が感性です。感性は、創造力、表現力、安らぎや潤い、活力を生み出し、豊かな心を育てくれるのだと思います。これも、子どもが成育の過程で学び、これからも学び続けていくことなのだと思えます。

よく、「子どもは親のうしろ姿を見て育つ」と言われますが、実際にはうしろ姿どころではありません。前、後ろ、横から、物腰、態度、言葉遣いなど親の全てを見て育つのだと思います。子どもにとって、毎日の生活の中で親こそが最も身近な人間のモデルなのです。子どもに対して直接言ったりしたりした行動でなくとも、家庭や社会での親の態度、行動を通して無意識のうちに子どもは様々なことを身につけています。子どもの前に立つ我々も同じです。このような後天的なもの、子がもって生まれた資質が合わさって、一人ひとりの子どもがいるのです。それが「個性」なのだと思っています。

子どもたちが、今までに身につけた感性を發揮し、日々の活動のなかで、自分本来の力を発見したり、友だちとの協働により何かを創り出したり高めたりする喜びを感得してほしいと願ってやみません。

子どもたちの感性を豊かにするためには、子どもにだけ求めるのではなく、まわりにいる我々大人の心が豊かでなければなりません。教育に携わる者として、そのために精進しなくてはならないと年頭にあたり、心新たにすものす。

平成19年を代表する漢字に『偽』が選ばれました。今年は、子どもたちのまわりに『真』や『善』があふれる1年であることを願い、1日1日を大切にすした教育を進めてまいります。今年も、どうぞよろしくお願ひいたします。